

田原坂西南戦争資料館

この小さな博物館は、1877年の西南戦争で最大の戦いとなった田原坂の戦いの跡地に建っています。この戦いは3月4日から3月20日までの17日間にわたって繰り広げられ、中央政府の軍隊が勝利しました。2つの丘陵地とその間の谷間にまたがる戦場は、桜やツツジが植えられた公園になっています。

薩摩藩（現在の鹿児島県）の武士たちが、1868年に樹立された明治政府の改革によって自分たちの地位が脅かされていると感じ、東京への進軍を決意したのが反乱の始まりでした。反乱軍は北上する途中、明治政府に忠実な軍勢が駐留していた熊本城に立ち寄り包囲しました。熊本城を失えば、明らかに弱さを示すこととなり、地方の反乱が全国規模の内戦にまで発展する可能性があったため、政府は勝利の決意を固め、包囲を解くために帝国軍部隊を派遣しました。政府軍は反乱軍の数を大きく上回り、遠距離戦では優れた武器（輸入されたイギリス製の銃器を含む）を持っていましたが、反乱軍は剣術に長けていたため、接近戦では有利でした。

戦争の原因

館内の最初の部屋では、戦争の原因を探ります。2つ目の部屋では、田原坂の戦いを再現した映像が、ジオラマや照明、効果音などを交えて展示されています。再現されたシーンは、戦闘が最も激しく行われた場所を明らかにした戦場での発掘調査に基づいています。続いて、両軍の服装や武器の展示が行われます。武士の反乱軍が自前の服を着ていた一方、政府軍は制服を支給された徴集兵で構成されていました。この紛争で使用された主な銃器は、当時ほぼ最新であった後装式のスナイドル銃で、旧式の前装式の銃よりもはるかに素早く装填することが可能でした。使用済みの弾丸を溶かして鋳造し、再利用する必要があったという事実から、反乱軍の相対的な弱点が垣間見えます。資金が尽きたときには、薩摩の貨幣を特別に印刷するところまで追い込まれていました。

本館を出てすぐのところには、戦災で被害を受けた倉庫があります。これはかつて近くにあった実際の倉庫を復元したものです。この倉庫は、多くの犠牲者を出した西南戦争を受けて佐野常民伯爵（1822-1902）が博愛社を設立し、後に日本赤十字社へと発展した経緯を説明するために使われています。